ハピカム ミライデザイン会議

九重町

環境 Environment

くじゅう連山と、その山麓に広がる草原風景。九重町が誇る大自然は、大分の川を潤し、空気を清め、生活の電力をももたらしてきた。かけがえのない自然と、それを守るための伝統の知恵や技を、どう次世代に渡していけばいいのか―。身近な地域の「宝」探しが、ヒントを与えてくれそうだ。

クリーン+ツーリズムの町

虫の楽園でもある九重

直野　この分科会のメンバーで、九重町の出身は吉光さんだけで、あとは県外出身の方々です。九重町とかかわるようになったきっかけを交え、自己紹介をお願いします。

千手　九重町は地熱で有名な地域。大学で地熱について学び、学生の時から調査などで週1回くらい通っていました。九重インターチェンジのない頃で、玖珠で下りて。九州電力八丁原発電所の勤務は3回目で、昨年7月に赴任しました。

若手リーダー
地熱発電技術者（八丁原発電所）
千手隆徳 さん

川野　兵庫県三田市の自然学習センターに勤めていましたが、結婚して大分県に来ました。自然を保全、紹介する仕事をしたいと探していたら、「九重ふるさと自然学校」があることを知って。よく野焼きやミヤマキリシマを見に来ていたので、こんな自然が豊かな所で働きたいと職員募集に応募し、採用されました。

種村　5年前、当初は1週間の農業研修の予定で、町内のとある農家に滞在しました。自然が豊かで、そこにかかわる人たちの輪がとても大きくて。自分もこの地域にかかわって働きたいと、漠然と思っていたところ、環境省のアクティブレンジャーという国立公園内のパトロールなど、現場を担当する職員として採用されました。昨年から長者原ビジターセンターで自然解説員をしています。NGOのツアーなどでいろいろな国を回る中で、日本の文化について考えたのが原点です。

吉光　私は中学も高校も地元で、大学はAPU（立命館アジア太平洋大学、別府市）。ずっと地元にいたら見えないことも多く、県外で九重町の知名度はどれくらいあるのかと気になっていました。大学で環境に関する多くの講義を受けたり、他県から来た友人と話すことで、外からの視点を吸収する機会に恵まれました。町の文化センターに勤務している時に、小学生に町のことを教える機会があり、あらためて町のさまざまなことを調べました。現在は自然をどう守っていくかを勉強中です。

永野　大学教員の前は、新潟県の松之山町（現・十日町市）の「キョロロ」という科学館で、地域づくりと里山再生に取り組みました。重要視していたのは、地元の人と話し合い、地元の宝を探していくということ。よく地元の人は、「何もない町」と言ったりしますが、そんなことはない。例えば、九重町は虫の楽園でもありますよ。

直野　私は整理部というところで、記者が書いてきた原稿を紙面にレイアウトする仕事をしています。朝刊を作り終え、会社を出るのは午前2時ごろ。人間らしい生活リズムから離れている気がしますが、九重町の風景に触れると、人間らしさを取り戻せる気がする。家族が病気になった時、本人の希望で連れてきたことがありますが、雄大な風景を見ていると顔色が良くなって。エネルギーをもらえる場所というイメージを持っています。それでは自然の話題として、担当している分野で抱えている課題があれば、教えてください。

頭が痛い外来種の駆除

種村　九重町の自然といえばくじゅう連山と、山麓に広がる草原風景が特徴ですが、外来植物などが侵入し、頭を痛めています。草原は人の手が入らないと維持できないので、人材育成が課題かなと。ボランティアの中心は60、70歳代です。

若手リーダー
長者原ビジターセンター自然解説員
種村英大 さん

川野　以前働いていた兵庫県の施設は、人口11万人ほどの市にあり、自然に関心のある人、やる気のある人を相手に活動していました。九重町は約1万人で、関心のある人もいるが少ない。環境保護に関心はあるが、まだ動いていないという人たちを、いかに巻き込んでいくかが課題です。

直野　どんな取り組みをしているんですか。

川野　最近は、町の生き物調べをしています。カッコウが鳴いている場所があれば情報をください、といった呼び掛けをしたり、九重町の広報誌に身近な自然に関する記事を出したり。

若手リーダー
九重ふるさと自然学校リーダー
川野智美 さん

直野　地元の人は日頃、町の自然を意識しているんでしょうか。

吉光　九重で自然を守ろうと動く意識の高い人は、飯田地区に多い。やはり、九重町の自然と言えば飯田だからでしょうか。その他の地区の人たちの意識と隔たりがあるような気がします。

種村　国立公園だけが自然じゃない。あちこちで野焼きをし、かやぶきを再生した家があり、田畑があって。それが九重町の自然だと思うんです。自分の暮らしの中で自然を意識することが大切。

直野　外来種の話ですが、川野さんは、その関係に取り組まれているんですよね。

川野　啓発用の紙芝居を作ったことがあります。

直野　飯田では外来種のキクが増えたとか。

吉光　誰かが「きれいだから」と、道沿いに植えたと聞きました。

永野　日本の自然界では、きれいなものを残しておこうという考えがあって。地元の自然に必要かを判断する目がなくてはならないと思います。

住民が持つ価値観が鍵

直野　外来種の駆除の具体的な活動は。

種村　植物だと抜き取り、刈り取りですが、やり方を間違えると、広げてしまうこともある。難しいです。

川野　やってもやっても生えてくるので、携わっている人は疲れています。

吉光　季節が変われば、違う種類が生えてくるし。

直野　予算や人を確保すれば、改善されるんでしょうか。

川野　まずは継続することですね。

吉光　「こういうのが外来種ですよ」と、町も広報で伝えたりします。昨年はケーブルテレビを利用しました。見分けるのは難しいですから。

若手リーダー
九重町危機管理・町民安全課環境保全グループ主任
吉光優佳 さん

永野　学校で取り組んではどうでしょうか。

直野　広報に教育と、知ってもらう取り組みは大事ですね。ただ、依然として外来種はなくならない。もう一歩踏み込んだ対応はできませんか。

種村　大学とか研究機関に入ってもらって、具体的なマニュアルがあったらいいですね。

永野　研究機関がかかわり、学術的、科学的な裏付けのあるものをつくるのは必要と思いますが、地元がどう結び付いていくか。外来種駆除は骨が折れる仕事で、見返りも少ない。住民が地元の自然にどういう価値観を持っているかが鍵です。地元の自然を守るために、（外来種は）なくなってもらわなければ困るという意識でまとまっていけば、研究者も引きつけられるのでは。

直野　子どもの時から教えていくことは大切です。

永野　地元の生き物を知るというところから入るといいと思います。すると、これは昔からいる生き物だ、これは要注意の生き物、つまり外来種だと分かる。それを教える人材を、どう育てていくかが課題かなと。以前勤めていた施設では、地元の人材リストを作りました。自然を守るためには、人を育てていかなくてはなりません。

伝統の知恵、後世に継承

直野　九重町にそういう資料は。

吉光　環境分野以外の人も含めた人材バンクみたいなものはあります。

永野　自然がなくなるより、地元の自然や文化の知識を持った人がいなくなってしまうことが問題です。それは75歳ぐらいから上の人でないと持っていない。継承を急がないと。

吉光　その年齢の人は、今はかなり元気ですが(笑)。

川野　地元の方から学ぶものは多い。老人会の人に苗の手植えや炭焼き、石組みの仕方などを教えてもらいました。

吉光　若い世代でできそうと思った作業も、長年の勘やコツが必要で、難しかったりする。地域力が落ちているのか、後継者づくりが進んでいないと感じます。隣近所との付き合いを復活させたいという思いはありますが、事件のニュースとかを見ると、近所の人にも注意をしないといけないような気にさせられて。もっと前向きな情報を出していかないと。

永野　伝統の知識でも、今の生活に必要じゃないからと、失われているんですね。これから生物の再生が必要になる時代が来ても、再生のための知識や技術を残していないと、できません。里山の管理とかは長年の知識や伝統で成り立っている。前にいた施設では、人が引き継いでいくのは難しいからと、とりあえず文化や生き物などをビデオで撮ったりして、デジタルデータベース化する取り組みをしていました。

生き物シンボルに再生

直野　町内で、トキが生息できる豊かな自然環境をつくろうという動きがありますね。

永野　トキは自然再生のシンボルですが、大分にはいた記録がないんです。地域の人が、九重の環境をどうしていきたいか、どの生き物と暮らしていきたいかを話し合い、地域の資源をあらためて見詰め直し、最終的に、地元の中からシンボルを見つけるのがいいと思うのですが。

アドバイザー
大分大学教育福祉科学部講師
永野昌博 さん

川野　同じ夢をみんなで見ようとすることで、より多くの人に活動を理解してもらえるかもしれません。トキは確かにシンボルになり得ますが、目標にするというよりは、トキを養うための自然環境について考えてもらう入り口かなと思います。

種村　生き物をシンボルにするのは大切だと思います。長崎県対馬市のように、国の天然記念物であるツシマヤマネコを中心に、圃（ほ）場や道路などの整備が進み、地域ががっちりまとまった例もあります。夢を実現するために段階を踏んでいけばいいのではないでしょうか。

地熱発電所でエコ教育

直野　九重町は、八丁原の地熱発電所も有名です。

千手　地熱発電所はCO_2を出さないのが特徴です。地下から高温高圧の蒸気を取り出して、電気を発生させるので、火山地帯に多くなります。国立公園と近接することも多いので、いかに景観になじむ発電所にするかというところに重点を置いています。地熱による発電量は、九州内の発電量の2％、全国では0.2％と、非常に少ないですが、九重町には地熱発電所が集中していて、町の自然エネルギーの自給率は全国で上位。アピールになるのではないでしょうか。

直野　地熱は、発電量を増やすのが難しいエネルギーなんですか。

千手　有望な地域のほとんどが国立公園内にあるといわれ、周辺は温泉街も多い。資源の量を知るために、長期間の調査も必要となります。いろいろと新しい技術は開発されていますが、自然というのは人間の思い通りにはならないものですから…。

直野　建物も景観に配慮しているんですよね。

千手　配管を低くし、周囲の木々に隠れるようにして。展示館を併設していますが、東日本大震災以降、自然エネルギーが注目され、昨年度は5万1千人が訪れました。ツアーに加え、学生の社会見学が増えて。CO_2を出さない電源という意味では教育材料になっているのかなと。

直野　発電所と自然を組み合わせた教育プログラムは、地球を身近に感じることができそうです。

未来のため残していく

永野　CO_2を出さない発電所があり、豊かな自然がある「クリーンな町」として、町内の資源を教育やビジネスにつなげていきたいですよね。都会の人には苗を植えたい、木を切りたいという欲求がある。将来的に、環境を守りながらお金を儲けていくという、九重町ならではのビジネスモデルをつくることができればなと。

吉光　地元の農家に泊まって、作業を体験するグリーンツーリズムのプログラムはあります。そこから町や自然に魅力を見いだして、将来的に住んでもらいたいですね。

川野　地熱や草原、ミヤマキリシマといった資源と、私たちの活動プログラムをつなげれば、九重ならではの取り組みができるのではと思います。

千手　地熱発電のように、人間と自然のうまい付き合い方があると示すのは、教育にいいと思うんです。財産である自然は、人間が豊かになるために都合のいいように利用するだけではなく、未来のために残していかなくてはなりません。

永野　大分県民も森林環境税を取られていますが、使い道はいまひとつ。そこに手を挙げて、九重町はこんなことができると提案できるといいですね。

川野　助成金などを環境のために使うのも一つの手段ですが、環境に配慮した酪農や農業をして、作った商品に付加価値が付き、業（なりわい）となれば、自然と暮らしが共生できます。

九重町まるごと博物館

直野　環境のおかげでビジネスが成り立っているのに、ボランティアに頼っていたり、外来種が絶えなかったりと、肝心な所にお金が落ちていない。

コーディネーター
大分合同新聞記者
直野誠

永野　環境はお金として見えないので、森や山の存在価値を貨幣換算するのは面白いかもしれませんね。個人的な夢ですが、博物館的な施設が九重にできてほしい。展示するだけのハコものではなく、地域づくりや学術研究もバックアップ、コネクトできるハブ機能を持った場所として。

種村　予算的な裏付けや人員配置が解決しないと、ハブ機能にも限界があります。そんな場所ができたら、楽しい地域になるだろうな。

永野　地域の宝箱のような存在になると思いますよ。子どもが何かを見つけたら、学芸員が宝かどうか見極めてくれるとか。地元の宝探しが、地域と環境の再生になっていくんじゃないでしょうか。

ひとの ときを、想う。JT

JTでは、分煙方法について知見提供・提案・アドバイスを無料にて実施しています。例えば…

- □ オフィスに喫煙室を造りたいけど、どうすれば…
- □ 飲食店で喫煙席と禁煙席を分ける際のポイントは…
- □ 喫煙室からのニオイの漏れを改善したいのだけど…
- □ 床にたばこの焦げ跡の付かない対策は…
- □ 分煙機について知りたい。
- □ 分煙の事例を紹介して欲しい。
- □ 喫煙マナーを啓発できるポスターが欲しい。

分煙に関する取り組みや手法にお悩みの方は、下記までお問い合わせください。

お問い合わせ
日本たばこ産業株式会社　大分営業所　社会環境推進担当
大分市王子港町1−26　TEL.097-534-7111
営業時間／平日9:00〜17:40